

νύξ (Nyx): 夜
+
illuminate: 照らす

Nyctilum

ニクティラム

思索駆動コース
18C 黒川 悠馬

ゆるく相互につながり続ける仕組みについての思索

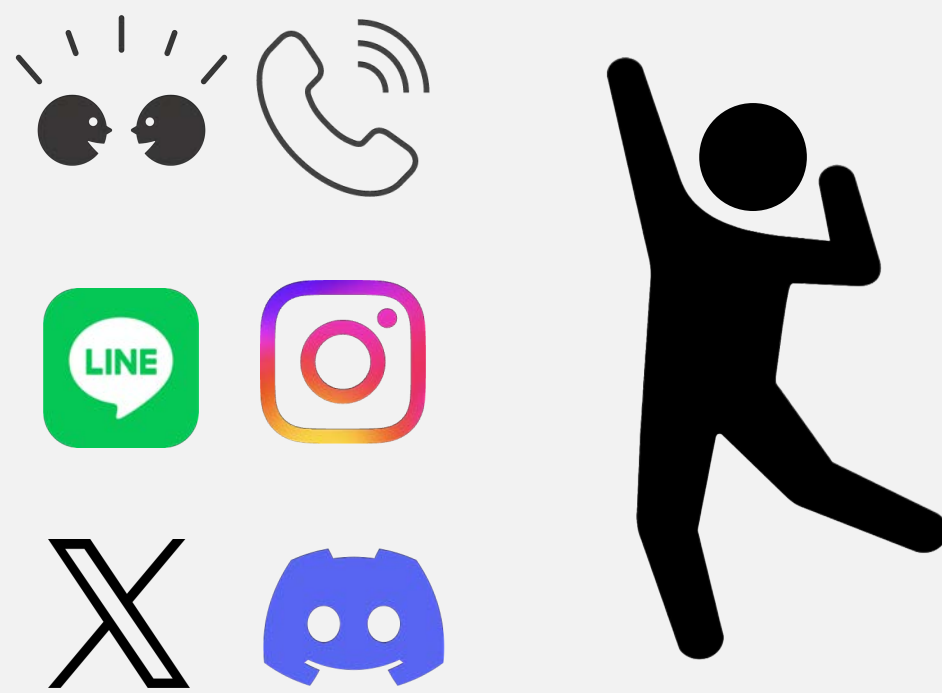
多様なコミュニケーション方法

多くの方はさまざまなコミュニケーション方法を使い分けて生活している

- 対面での会話
- オンラインチャット
- 電話越しの会話
- SNSの投稿 / 閲覧 etc...

これらのツールはより良いコミュニケーションのために、さまざまなユースケースに合うように発展してきた

元気なときはコミュニケーションのモチベーションがある現代の市場には、その要求に応じてくれる適切なツールが数多く出回っている



すべて使わなくなってしまうことも



思い悩んでいるとき・無気力になったとき

対面で会ってコミュニケーションができないことはもちろん、オンラインでのコミュニケーションを取ることがつらく感じたり、難しかったりすることがある

思い悩んでいる本人

- 社会に接続されている感覚が嫌だからログアウトする
- 対面で会っていない手前、ログイン履歴があったら顔向けできない
- それを見ると辛い現実と直面してしまうから、怖くて開けない

友人

- とにかく何かしらの方法で、当人がどのような状況か、そもそも生きているかどうかを知りたい

対面・オンライン
両方で連絡可能

連絡状態の

極端な段差

対面・オンライン
両方で連絡不可能

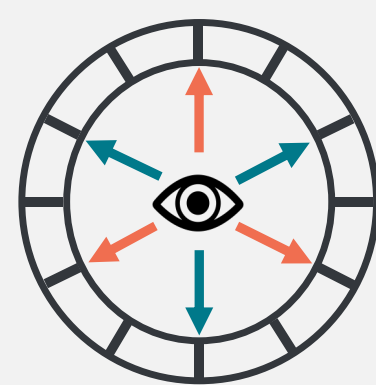
問い：どのようなスロープをかけるか？

回答：お互いに対する眼差しを途切れさせることなく、
柔らかに友人や仲間とコンタクトしつづける

並立させたいこと

プライバシーに配慮する

「お互いに対する眼差しを途切れさせない」ことは、「常時行われる相互監視」とほぼ同義



ジェレミー・ベンサムは、受刑者の更生や社会秩序の維持といったポジティブな目的からパノプティコンを構想したが、後世においては監視社会の象徴としてディストピア的な側面ばかりが強調されるようになってしまった

取得する情報によっては、お互いを監視・抑制することが主目的であると捉えられる

日常に溶け込ませる

他人の目を強く意識すると、本人の自由な行動・判断が妨げられてしまう

- ある種の『パノプティコン』的な側面を持ち得るコミュニティを作ろうという実験であり、セルフ・ディシプリンが強く働くと、本来の目的とは逆行して、さらにその状況がつかなくなってしまふ

システムの存在を意識せず運用できることが理想

適切な時期に気づけるようにする

授業に来なくなったり、SNSやメッセージでのやりとりが止まった後に、声をかけるか判断する材料がない状態が一番困ってしまう

- 単純に忙しかったり出かけたりしているのか、それとも大丈夫ではない兆候が見られるのか確認できれば、手遅れになる確率を下げられるのでは？

今回の試みについて

プライバシーに配慮しながら、

- ① 精神状態が大丈夫そうか ② 極限状態に至っていないか

という情報を取得し、お互いに共有する仕組みをすることによって、

「お互いに対する眼差しを途切れさせることなく、柔らかに友人や仲間とコンタクトしつづける」という目的を実現しようとする試みである

取得する情報について

- ① 精神状態が大丈夫そうか 直近24時間の歩数データ



精神状態がダメになると家から出られなくなることが多い
普段より明らかに少ない状態が続く場合は、家に引きこもっている可能性が考えられる

- ② 極限状態に至っていないか スマホの画面をONにした時刻のデータのうち、最新のもの

精神状態が芳しくなく外出していなかったり、オンラインでのコミュニケーションが困難な場合でも、とりあえず生きていれば友人としてはOK
スマホに全く触れた形跡がないとなると、万が一のことを考えるべきかもしれない

制作物の概要

Nyctilum

- 精神状態が大丈夫そうか
- 極限状態に至っていないか

を記録し、フォロワー同士でその情報を共有することでゆるやかに繋がりを続けることを支援するシステム

【役に立つ場面】

以下のような行動の際の判断基準として用いることができる

- ① 普段はアクティブな人が数百歩未満の行動を数日続けていた場合、通常とは異なる状態にあることが推察される
→ 注視すべきかもしれない
- ② どのような手段でも連絡がつかず、スマートフォンの最新アクセス時間が24時間以上前である
→ 早急な対応が必要な可能性も

デモ動画



1日の歩数
最終アクセス時間
を共有します



アプリのホーム画面

制作以降の思索

本作品は、お互いの情報共有による、ある種の本人の意図しない介入を認める、ソフトではありながらもパターンリズムを肯定する立場をとっている
当然パターンリズムを振りかざす者は、適切な関与と過干渉の境界やそのグラデーションについて考える責任があると感じている

現在の私は、以下の問いに対する明確な答えを持ち合わせていない

- 成熟した個人への介入が、本人の自由意志と尊厳を事実上踏みにじり、選択や責任を奪うことにはならないだろうか
- 本人の意志を無視して介入し、本人は辛さを背負う一方、周囲はひとときの安堵や幸福を得る
これが最大多数の最大幸福に至る判断であったとき、果たしてこれは正しい判断と言えるだろうか

あなたはどうか考えますか？